

私の視点 ● ウィークエンド



ハンガリー立山研究所社長
元法政大教授

ここ数年、ハンガリーの学者や実業家を紹介した書物の翻訳を行っているが、人名のカタカナ表記に頭を悩ませている。

アメリカで活躍している人々の名前は、出身地を問わず、英語読みにするのが一般的だ。そのことに特に異論はないが、アルベルト・アインシュタインのように尊敬を持ってドイツ語読みで呼ばれるケースもあるから、事は簡単ではない。日本でのカタカナ表記には、これとはまた別の問題

opinion news project

がある。

日本でもよく知られているハンガリー人物理学者スィラードは「シラード」と表記される。この事例のように、外来語や人名・国名

のカタカナ表記では「ス」と「シ」、あるいは「テ」と「チ」の音が区別されず、「シ」や「チ」に一括されてしまう。しかし、「ス」と「シ」の音を取り違えると、発音している言葉が理解されない。

例えば silicon は「シリコン」であって「シリコ」ではない。Brazil は「ブラジル」であって「ブラシル」ではない。「スイ」が「シ」に、「ズ」が「ジ」に一括され

る。また ticket を「チケット」、dilemma を「ジレンマ」のように「テイ」を「チ」、「デイ」を「ジ」に表記するが、この発音も外国では通用しない。

確かに、日本語では方言によって「ス」と「シ」がなまってあいまいになる。「知っている」を「スツイル」、「蹴」を「スワイル」と言っても、文脈から理解できる。しかし、外国語でこのなまりは通用しない。

「ス」と「シ」の音の無分別は、日本人の外国語能力の評判を落としている原因の一つだ。

名前を間違えて発声されて気にならない人はいない。だから現在では原語の

発音になるべく忠実に人名を表記するのが世界標準だ。これにならば前サツカー日本代表監督 Nicos は「ジニコ」でなく、「ズイニコ」または「ズイツニコ」とすべきで、新代表監督に決まった Ivica Osimi は「掛斐茶・惜しむ」でなく、「イウイツァ・オスイム」である。

発音に近い表記をとると常用表記からはずれたり、1文字で済むところが2文字になったりする。しかし国際化時代の日本人の語学力向上のためにも、まずカタカナの慣用表記の見直しが先決ではないか。外来語や人名のカタカナ表記に、もっと繊細でありたい。

◆カタカナ表記「オシム」は「オスイム」だ